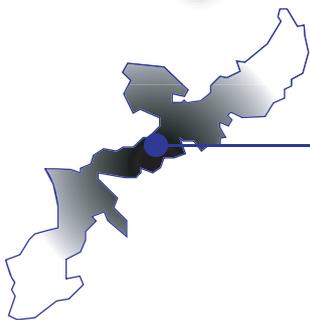


ウチナンチュが語る

基地と沖縄、ガマの悲しみ



知花昌一氏 profile

1948年生まれ、沖縄大学中退・在学中から沖縄復帰運動を指導。楚辺通信所内への立ち入り運動やガマの調査、米軍基地返還の取り組みなど、平和運動家として活躍中。
現在 沖縄県読谷村・村会議員。

著書 『焼きすてられた日の丸基地の島・沖縄読谷から』
『我肝（ワチム）沖縄ワチム（わが心の）オキナワ』など

三線演奏と 知花昌一講演会

日時 4月24日(土)

午後1時30分 三線演奏

午後2時 講演

場所 人権啓発センター(高知市本町)

参加費 1,000円 高校生以下無料



ウチナンチュとは、沖縄の方言で南の島の人、という意味で沖縄の人のことであり、対する日本人はヤマトンチュといわれます。

知花昌一さんは、平和憲法を掲げた日本への憧れを強く抱いて、学生時代から沖縄復帰運動を指導してきました。しかし日本政府は、復帰後も米軍基地をそのまま残し、沖縄の現状を改善しようとはしませんでした。思いは怒りと失望へと変わり、1987年沖縄国体少年ソフトボール開会式では、メインポールに掲げようとする日の丸を焼いて、抗議の意を示しました。

1996年には、楚辺通信所(象のオリ)内の自分の土地の返還を求めて、立ち入り運動を起こし、これがきっかけとなっ

て、施設は移転しました。その他、読谷村では、さまざまな合法的な方法でもって、ユニークな米軍基地返還運動を行ってきました。

また、集団自決があったチビチリガマを調査し、慰霊の像も建立しました。その後、ガマの前に立ち、沖縄戦の悲惨な住民の姿を伝え続けています。そして、戦争とは、軍隊とは、ヤマトのなかの沖縄とは、いったい何なのかを私たちに問いかけています。

講演の前には、三線(さんしん)を手に、平和への思いをこめて沖縄の心を奏でます。1時から、沖縄戦記録フィルム1フィート運動の会作成の映画「沖縄戦の証言」も上映します。ぜひおいでください。